自立に向けて

近藤　朗

「あなたのお子さんは何歳になったら独り立ちしますか。」どきっとする問い掛けです。「あなたはお子さんを何歳になったら独り立ちさせますか。」こちらの問い掛けの方がどきっとするかもしれません。

親離れができない大学生が増えているそうです。ベネッセ調査（二〇一二）によると、大学生活や就職に関して「保護者の意見に従うことが多い」と答えた学生が四十五・九パーセントに上ったとの報告がありました。更に「困ったことがあると保護者が助けてくれる」については四十九パーセント、「お金が必要になったら保護者が援助してくれる」は六十四・四パーセントだそうです。

このように半数又は半数以上の若者が親に依存している状況をどう考えればよいのでしょうか。少子化が進み、親子関係が密接化するのは仕方のないことなのでしょうか。もう少し自立心をもって生きていってほしいものだと思います。

では、自立心を育むにはどうしたらよいのでしょうか。私は「待つ」ではないかと考えています。ただ待つのでは放任と変わりません。放任という極端な行為は子どもの成長によい影響を与えるものではありません。やってはいけないことです。

ではどうすればよいのか。昔から「魚を与えるのではなく、釣り方を教えよ。」ということが言われています。

しかし、これはとても大変なことです。物や答えを与えた方がよっぽど楽だからです。すぐにことを終わらせてしまいたいと思うことは仕方のないことですが、釣り方を教え待ってあげることが、思考錯誤を通して本物の知恵と技術を獲得することにつながり、結果的に自立に向かわせるのではないかと考えます。

「待つ」ことは最大の忍耐が必要になります。子どもは子どもなりに悩み、親の思う方向に行かなくなることもあります。そのようなときには、もう一度釣り方を教えて待つことを大切にしたいものです。

夏休みになります。お子さんを独り立ちさせる歳までに家族で過ごすことのできる時間は思ったより短いものです。特に小学校時代は何よりかけがえのない時間です。親子の信頼関係を一層深め、子どもを自立に向かわせる充実した夏休みになることを願います。